クリトン　　　変りはない。

（プラトン，久保勉訳
『クリトン』『ソクラテスの弁明・クリトン』岩波文庫）

## 3　理想主義的なあり方 ―プラトン

▶ pp.32～34

### エロースとイデア

さて，正しい少年愛を通して，この美の姿が見えはじめる。そうなれば目的にたどり着いたも同然。エロスの道を正しく進むとか，誰かによって導かれるというのは，このようなことを指す。すなわち，さまざまな美しいものから出発し，かの美を目指して，たゆまぬ上昇をしていくということなのだ。その姿は，さながら梯子（はしご）を使って登る者のようだ。すなわち，一つの美しい体から二つの美しい体へ，二つの美しい体からすべての美しい体へと進んでいき，次いで美しい体から美しいふるまいへ，そしてふるまいからさまざまな美しい知へ，そしてついには，さまざまな知からかの知へと到達するのだ。それはまさにかの美そのものの知であり，彼はついに美それ自体を知るに至るのである。

（プラトン，中澤務訳『饗宴』 光文社古典新訳文庫）

## 4　現実主義的なあり方
―アリストテレス

▶ pp.35～37

### 習性的徳と習慣

だから明らかにまた，＜性格の徳＞はどれ一つとして，自然によってわれわれにそなわるのではない，なぜなら，自然によって存在するどのようなものも，他のあり方をするように習慣づけられることはありえないからである。たとえば自然によって下方に落ちるようになっている石は，たとえ人が一万回これを上方に放り投げて習慣づけようとしても，その方向に動くように習慣づけることはできないのであって，また火を下方に動くように習慣づけることもできず，その他およそ自然によって一定のあり方をするいかなるものも，そのあり方と異なるあり方をするように習慣づけることはできないのである。それゆえ，もろもろの＜性格の徳＞がわれわれにそなわるのは，自然によってではなく，また自然に反してでもなく，むしろそれらの徳を受け入れうる資質をわれわれがもっているからであって，習慣を通じてわれわれは完全なものになるのである。

（アリストテレス，朴一功訳『ニコマコス倫理学』
京都大学学術出版会）

## 5　幸福をめぐる問い
―ヘレニズムの思想

▶ pp.37～39

### 自然と調和して生きる ―ゼノン

このゆえに，ゼノンが最初に，……（人生の）目的は「自然と一致和合して生きること」であると言ったのであるが，そのことは「徳に従って生きること」に他ならなかったのである。なぜなら，自然はわれわれを導いて徳へ向かわせるからである。……それゆえに，自然に随従（ずいじゅう）して生きることが（人生の）目的になるわけである。すなわちそれは，各人が自分自身の自然（本性）にも，また宇宙万物の自然にも従っているということであり，そしてその場合には，共通の法が……通常禁止していることは何ひとつ行わないということなのである。

（ディオゲネス・ラエルティオス，加来彰俊訳
『ギリシア哲学者列伝』（中） 岩波文庫）

### 快楽主義 ―エピクロス

快が目的である，とわれわれが言うとき，われわれの意味する快は，――一部の人が，われわれの主張に無知であったり，賛同しなかったり，あるいは，誤解したりして考えているのとはちがって，――道楽者の快でもなければ，性的な享楽のうちに存する快でもなく，じつに，

肉体において苦しみのないことと霊魂において乱されない（平静である）ことにほかならない。

（エピクロス，出隆・岩崎允胤訳
「メノイケウス宛の手紙」『エピクロス』岩波文庫）